

日本統治解放後の韓国における日本語敬語学習についての一考察 - 韓国高校第2外国語選択科目である日本語教科書の分析をとおして -

著者	池田 誠司
著者別表示	IKEDA Seishi
雑誌名	日本海域研究
巻	52
ページ	93-109
発行年	2021-03-17
URL	http://doi.org/10.24517/00061704



日本統治解放後の韓国における日本語敬語学習についての一考察 —韓国高校第2外国語選択科目である日本語教科書の分析をとおして—

池田誠司^{1*}

2020年9月29日受付, Received 29 September 2020
2021年1月26日受理, Accepted 26 January 2021

A Report on Honorific Phrases in Japanese Language Textbooks at Senior High Schools in the Republic of Korea in the Decades after Japanese Occupation

Seishi IKEDA^{1*}

Abstract

During Japan's occupation of the Korean Peninsula (1910 to 1945), various Governor-Generals gave instructions to force elementary school children to learn honorific Japanese language phrases. The local children memorized these honorific phrases and had to use them both inside and outside of school. After liberation from Japanese occupation, Korea fell under the temporary control of the victorious wartime powers. From the end of the war until the end of the 1950s, the school children had no opportunity to study Japanese. From the early 1960s onwards, a number of Japanese language schools opened in central Seoul. At that time, some local people wanted to learn Japanese so that they could enjoy Japanese novels. Others wanted to better understand what was being talked about on Japanese radio broadcasts. In 1965, the South Korean and Japanese governments signed a treaty for the normalization of relationships between the two countries. In 1975, high school students started to learn Japanese once again after a hiatus of thirty years. The textbooks that they learned from were completely different from the ones used during the occupation, particularly in relation to honorific phrases. During the thirty-five years of Japanese occupation, honorific phrases, which were very limited in applicability but helpful in consolidating Japan's control over the peninsula, were taught to each child for a period of four years. What the Governor-Generals aimed at was to make school children more obedient in Japanese towards Japanese rulers and to their elders. In the post-1975 textbooks, the honorific Japanese phrases were used to teach students to pay respects to their classmates and even to their younger brothers and sisters as well as to their elders and teachers. The students were also allowed to freely choose honorific words and phrases in order to express themselves. In every aspects of their lives, they were expected to choose for themselves the appropriate words and phrases when speaking Japanese. This depended on how they wished to behave in front of others, whether to be casual and friendly or formal and polite, and on how they wished to be perceived. In 2018, a total number of 531,000 of high school students, university students and business workers learned Japanese as well as Japanese customs and habits.

Key Words: Governor-Generals, honorific phrases, Japan's occupation of the Korean Peninsula
キーワード: 敬語, 日本による統治, 総督

¹金沢大学環日本海域環境研究センター連携部門外来研究員 〒920-1192 石川県金沢市角間町 (Visiting Researcher, Institute of Nature and Environmental Technology, Department of Inter-Institutional Collaboration, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192 Japan)

*連絡著者 (Author for correspondence)

I. はじめに

拙稿は日本統治解放後の韓国における高等学校及び民間の語学学校の日本語教育・敬語学習の指針、状況、課題を報告することを目的とする。日本統治下と何が同じであり、何が異なるのかを検証する。戦前・戦後の韓国の教科書編纂主体がどのように連鎖し、どのような意識を持ち、教科書編纂に臨んだのかを念頭に置きながら、日本語教科書について考察する。また、韓国教育基本法およびそれが担保する教育課程、その施策にも焦点を当てる。日本語教科書はその根本において教育基本法に則って編纂されているからである。

韓国の日本語教育は、第一次日韓協約前後の日本語教育から日本統治下普通学校、高等普通学校、および女子高等普通学校の「国語」（日本語）教育までの40年あまりと、李承晩政権末における民間日本語学校設立から1975年度の高校外国語科目としての導入を経て現在に至る韓国市民の60年に及ぶ日本語教育の合計100年あまりの歴史が存在するが、日本統治下と解放後の日本語教育を繋ぐ朝鮮総督府学務局的人的資源の継続性について日本語教育の視点より分析を試みる。朝鮮総督府の教育行政に関わる人的資源が1965年の日韓国交正常化のための条約締結後、文教部が日本語教育再開に向け本格的準備を始めることを可能にしたと考えるからである。

また、資料を提供する際に政治的意図による歪曲を防ぐため、異なる視点からの複数の資料を可能な限り記載することに留意した。

II. 朝鮮総督府における

日本語教育再開のための人的資源

1) 米軍政下の総督府学務局と学務局長俞億兼 (유억겸 ユ・オッキョム)

1945年9月9日に阿部信行総督、他2名が降伏文書に署名し、朝鮮は日本統治から解放された。その後の米軍政下の総督府学務局と学務局長俞億兼の人物像に焦点を当て俞の日本語教育への思いを検証する。

森田(1964)によると、日本統治の要であった朝鮮総督府は、日本政府がポツダム宣言受諾を公表した翌月の9月6日にソウルに到着したアメリカ軍の指示により、人的資源を含めた統治機構をアメリカ軍

にそのまま引き渡し、アメリカ軍政庁の管理下に置かれ、アメリカ軍が間接統治する形態をとる計画になっていたという。この計画に朝鮮人側が強く反対し、米軍政庁は折衷案として総督府の組織体制を維持したまま、朝鮮人の局長級官職の任命・配置と米軍側の同一官職任命・配置を提案した。学務局も例外ではなく、米軍側から選出された学務局長管理下に朝鮮人学務局長が配置される構図であった。9月12日、アーノルド軍政長官が就任し、阿部信行総督が辞任した。この章の3)で後述するが、俞億兼が同年12月に学務局長に就任した際、米軍の指令で顧問として残留した歴代朝鮮人学務局長二人のうちの一人名である前学務局長嚴昌燮以外、教育行政を統括した経験者はいなかった。

1945年9月20日に米軍側の軍政庁人事が発表され、米軍政が始まった。同年12月に俞が学務局長に任命されている。俞は東京大学法学部出身であり、東京大学法学部出身者は歴代の学務局長14名中11名に上る。彼らが解放前の学務局長の中で主流派であったことは間違いない。米軍政庁が俞を戦後初の朝鮮人学務局長に任命した背景には、朝鮮人学務局長を指導監督する米軍政庁からの学務局長である米軍エリオット少佐が朝鮮公教育の課題を冷静に見極め、具体的に彼の施策を実行に移す実務的な官僚を求めていることが推測される。1945年11月29日付の「朝鮮日報」によると、当時の喫緊の教育課題は38度線以南で小学校教員5,000名、中学校教員1,300名が不足していることと、3年以内に学齢児童の就学率を100%にすることが挙げられる。ではなぜ米軍政庁は、実務的な各施策を実施する上で俞億兼を適任であると判断したのだろうか。

俞の経歴について述べると、1896年漢城府で生まれ、私塾で漢学を学習し、1907年4月桂山学校に入学、韓国併合の翌年1911年3月卒業。同年京城中央キリスト教青年会学館中等科に五ヶ月間在学、1912年来日、同志社中学校普通部に入学、1916年卒業。同年7月京都第3高等学校に入学、1919年6月卒業。同年7月東京帝国大学法学部に入学、1922年3月卒業。同大学院にて一年間の法学の研究後、帰国した。李承晩(이승만 イ・スンマン)が主導する独立運動団体、「興業倶楽部」に加入するが、1938年西大門警察署に逮捕され、それ以降、統治する側に転向した。「興業倶楽部」については詳細をこの章の2)で後述するが、海外留学

体験者を母体としたキリスト教系の政治団体であった。兪は1941年8月臨戦対策協議会の発起人になり、同年10月に朝鮮臨戦報国団の理事になっている。

2) 日本統治下に於ける李軫鎬と兪の接点

臨戦対策協議会と朝鮮臨戦報国団、この二つの団体に朝鮮総督府学務局長を務めた李軫鎬が其々委員、顧問として活動していた。李との出会いは偶然だったが、その後の兪の経歴に影響を与えたであろう。兪、李この二人が日本統治、戦争遂行に加担したことは否定できないが、兪が李の経歴に強い関心を示し、李から学務局長の業務内容、業務の進め方等を具体的に教示された可能性がある。米軍政庁は兪の李との接点と実務レベルの優秀さを評価したのだろう。日本統治解放後、軍政庁が学務局長に兪を任命したのには必然性があったようだ。兪が学務局長に任命されたもう一つの理由は彼の日本留学経験にあったと思われる。木村(1998)によると、既述の「興業倶楽部」は、日本統治下の三大新聞の一つである「東亜日報」の政治的活動と人的に密接に繋がった1910年代の米国留学経験者を主流にしたキリスト教系の政治団体であったという。日本留学経験者の多くが「東亜日報」グループ関係者であったが、兪の経歴から判断すると「興行倶楽部」に加入したことは容易に理解できる。木村は、「興行倶楽部」、「東亜日報」グループの会員が李氏朝鮮の名門両班出身ではなく日本統治下の富裕層の出身であり、日本、米国で学生時代を共有した互いが「近い」存在であり、彼らが社会主義・共産主義に強い警戒心を持ったのは自然のことであると言う。

以上二つの理由から、米軍政庁が兪を学務局長に任命した可能性は極めて高い。1945年12月27日付「朝鮮日報」に朝鮮人学務局長に兪億兼が就任したことが掲載されたが、兪の過去の経歴に触れることはなく、学務局長に就任した事実のみを伝えている。

3) 学務局長李および兪の日本語教育観

学務局長としての李軫鎬の業績について、稲葉(2010)は1929年1月20日付の「東亜日報」の記事より、普通教育普及一面一校案²⁾、師範教育改正案の二つを挙げている。この二つの懸案は、この章の1)で述べた米軍政下の学務局に引き継がれることになる。韓国教育開発院(2005)によると、兪の学務局長お

よび文教部長在任期間(1945年12月27日～1947年11月8日)を含めた1945年から1950年迄の初等学校児童数は1,372,883名から2,658,420名に増加し、同時期の初等学校教員数も13,064名から47,248名に増加している。兪の指導の下、教育行政担当者は地方道庁と連絡しながら業務を進めたと考えられる。

では李の日本語教育についての考えはどのようなものであったのか、そして兪にどのような影響を与えたのかを見てみたい。先ず二人の共通点として学務局長就任以前に日本に滞在している点である。兪の日本留学は既述したとおりであるが、李の日本滞在は説明が必要であろう。

李は李朝末期の1867年(慶応3年)ソウルに生まれ、1882年(明治15年)に武科に合格し³⁾、1894年の第2次東学党の乱を鎮圧する戦闘に参加、日本軍と行動を共にした。大韓帝国皇帝高宗をめぐる権力闘争の渦中、1896年に日本に亡命、1907年に帰国を果たしている。李は日本統治解放の翌年1946年に他界したが、彼の生涯は李朝末期から日本統治を経て解放までの朝鮮近代史と符合している。世襲による権威・権力・身分の固定化が進む李朝末期は、社会から急速に活気が消え失せ、限られた数の血縁集団が中央権力争奪に没頭し、自省しない状況であった。その状況を打開しようと、一足先に近代国家になった隣国である日本を模範にしよう、又は日本の国力を利用しようと李は考えたのだろう。稲葉(2010)は東京大学法学部卒、高文試験を経て、典型的な朝鮮総督府エリート官僚の出世コースを歩んだ八木(1978)の総督府朝鮮人高官についての推察を引用している。

(前略) 僕の察するところ今挙げたような幹部級官吏の大部分の本心は、「吾々韓国人には今直ちに総督府を転覆させて、独立を達成するだけの実力が備わっていない。依って、この際は進んでその機構の中に入り込み、吾々自身の手で韓国人の実力の伸張を図り、それによって独立の機を熟するのを待つのが得策である」ということになるんじゃないかと思うんだ。

「新民」第45号に掲載された李の檄文を稲葉(2010)より引用する。

(李は朝鮮語で)何よりもまず教育に主力を傾注すべきである。これが、国民全般の幸福を増進し、半島の民度を向上させる所以である。(中略)願わくは同胞よ！自重せよ。

稲葉(2010)は李の檄文の心境について既述の八木の推察と同一の見解を述べている。総督府側が日本統治を浸透させる手段として朝鮮人官吏を任用したとはいえず⁴⁾、李が教育を統括する総督府学務局長の地位が富国朝鮮という目標への中心的役割を果たせる地位であると、考えていたことはまず間違いないであろう。李と日本人・日本語との主な直接の接点は1894年の東学党の乱の鎮圧に日本軍と行動を共にしたこと、1896年2月の日本亡命、1908年7月平壤日本語学校校長就任、1909年4月官立平壤高等普通学校校長を兼任、1919年8月全羅北道知事就任、翌月高等官一等に昇進、1924年12月朝鮮総督府学務局長に就任したことにある。総督府での事務的文書能力の高さから判断して、日本語と朝鮮語はほぼ同レベルで習得していたであろう。

浅井(1995)の調査によると、1910年の中央総督府官吏総数534名のうち、朝鮮人官吏総数は38名に過ぎなく、全体の7%であった。38名中の35名は末端の官吏であり、主に内務部地方局に配属されていた。日本は併合の際、旧大韓帝国朝鮮人中央行政官吏を排除し、地方行政機関に異動させ、中央行政は日本人官吏が掌握し、地方道庁においても朝鮮人部長級事務官は皆無だったと述べている。1924年の李の学務局長就任の際、状況は変わらず(併合から敗戦まで14名の学務局長のなかで2名の朝鮮人が学務局長に就任した)、李軫鎬の学務局長抜擢は極めて異例のことであった。

「朝鮮総督府施政年報」(1925年度、1926年度、1934年度)によると、李の学務局長在任期間中(1924年12月1日～1929年1月19日)、在内地給費生(総督府が内地の大学へ派遣する官費留学生)が1925年度77名、1926年度81名と増加し、李が免官した後の1930年度以降減少に転じていると記述されている。年報によれば留学生は帰国後、総督府の斡旋で総督府や銀行、民間企業に就職している。なお、在内地給費生制度は1920年度より開始された。96年前に李が総督府学務局長に任命された時、日本語習得の有用性を自覚

していたと判断してまず間違いないだろう。

1946年の9月3日李軫鎬は亡くなった。79歳であった。以下は生前、月刊誌「朝鮮及満州」(第233号)に掲載された李の「過去二十年間に於ける朝鮮の教育の発達」からの抜粋である。李は1929年1月19日付で学務局長を依頼免官した。

(前略)一、普通教育 普通教育の機関は普通学校、高等普通学校及び女子高等普通学校である。普通学校は修業年限四ヶ年学科並に名称等も成るべくは前記の其れを襲ったが其の本領に於いては大に異なるところがある。即ち日本国民としての国民性の涵養、又国語の熟達と其の普及に力を用いたのである。(後略)

引用文中の「前記」とは1906年の教育令から1911年の朝鮮教育令迄の公教育をいう。李は「国語」教育を国民性の涵養の視点から捉えている。

79年前に李軫鎬、俞億兼が臨戦対策協議会、朝鮮臨戦報国団で出会った時、二人は日本を模範にした近代化への道程に日本語教育が必須であるという思いを強固なものにしたのだろう。

1940年の「朝鮮総督府及所属官署職員録」を分析すると、学務局に93名の職員が在職し、そのうち朝鮮人は9名の嘱託を含む14名であり、教育行政を担う学務課には日本人を除くと朝鮮人の嘱託が1名に過ぎなかったと読み取れる。さらに森田(1964)の説明を加えれば、日本統治からの解放直後の8月27日に総督府が連合軍司令部の要求で「終戦事務処理本部」を設け、「総務・折衝・整理・保護」の部局を開設した際、「学務」の部局がなかった。これは教育行政の引き継ぎが十分になされなかったことを意味するのではないだろうか。このことから俞が1945年12月米軍政庁下の学務局長、翌年2月文教部長に就任し、文教部を統括して行く際に、俞を補佐する教育行政に詳しい朝鮮人官吏はごく少数であると判断できる。また、教育行政統括の経験者は軍政庁の指令で顧問として残留した前学務局長嚴昌燮以外いなかった⁵⁾。歴代学務局長14名のうち、任期後、総督府内の他の部局に留まり、異動したのは牛島省三のみである。彼は1936年退官している。日本統治からの解放感が溢れる市井の雰囲気の中、日本語・日本

文化の教育をいかに再開すべきか、兪は暗中模索したのではないかと思われる。彼の経歴から判断すれば、敗戦を迎えた日本についてその原因と経緯を分析し、日本の強靱さを前提にした復興を彼の日本留学体験から確信し、韓国発展のため日本から学ぶべきであり、その媒体手段として日本語を習得すべきであると認識していたと考えられる。

兪は朝鮮人でありながら日本国民であるという自己矛盾を李に代表される他の朝鮮人同様に内在していた。兪は李の朝鮮人教育への意思を解放後の教育行政に反映させようとしたのだろう。解放後、教育行政を統括する立場に立ち、今度は外国語として韓国青年に日本語を学習させることを学務局長としての目標の一つにしたことは否定し難い。

Ⅲ. 李・尹両政権下前後の日本語教育をめぐる状況

先ず、徐（2012）の1950年代初めの小学校時代の手記を引用する。

（前略）当時は、韓国人でも街中で日本語を話ただけで「なぜ日本語なんかを喋るのか」と聞き咎めて殴られるような状況であり、そのような社会的な雰囲気の中では正式な国交もない日本との文化交流など論じられるはずもなかった。むしろ、李承晩政権下では、植民地時代に持ち込まれた日本の文化は「倭色文化」として一掃すべきものとされていた。（後略）

朝鮮戦争（1950年6月25日勃発、1953年7月27日休戦協定成立）当時の社会の緊張感と日本語・日本文化に対する否定的態度がうかがい知れるが、李承晩政権末期の1960年4月19日、同年3月15日の不正選挙強行に憤った国立大生を中心とする学生革命により李承晩は失脚し米国に亡命した。李承晩の失脚という国内事情を背景に、日本書籍が韓国国内に流入し、日本語学習テキスト、日本語基本参考書が入手可能となり、日本語学校が民間レベルで開設されるようになった。

Ⅱ章1) で記述したように李承晩は日本統治期に「興行倶楽部」の主導的な立場にいた。米国への留学体験があり、日本留学経験者との密接な交流が

あったことは想像に難くない。李承晩失脚後、同じく米国への留学経験があり「興行倶楽部」に加入していた許政（허정 ホ・ジョン）が同年4月27日より臨時代行として大統領権限を引き継ぐことになった。1961年5月13日付「朝鮮日報」の新刊紹介では、日本語学習関連として、「日本語読本自習書」（螢雪文化社）、「基礎日本文法」（螢雪文化社）があげられる。1961年1月13日付「朝鮮日報」によると、許政臨時代行、尹（윤 ユン）第2代大統領政権下での日本書籍のみを扱う専門書店数、日本語学校数、学習者層は下記のおりである。

- ①日本書籍のみを扱う専門書店数 ソウル市内 5カ所
日本書籍および洋書を扱う書店数 ソウル市内 10カ所余り
- ②日本語学校の数 ソウル市内 約20カ所
例：明洞に近いS語学院：10人中8人が女性、職業：職業婦人、大学生または高校生

同日付の「朝鮮日報」によると、1960年4月19日以降、海外書籍の輸入量と需要者が激増した理由の一つは、それ以前の韓国では書店側の申請書籍の種類、数量に関して当局側の制限が複雑に存在したが、4月19日以降は、書籍取得の際、文教部の推薦書が必要なことと、商工部を通して輸入する制限のみとなり、大幅に緩和されたことである。文教部の政策で自然科学系書籍は無条件に輸入された。しかし、日本書籍を専門に扱う書店は他の書店と比べその制限が未だに厳しいものであった。

次に特筆すべき内容は、ソウル市教育委員会から日本語学校設立が時期尚早であると警告され、受講生募集を公にしない個人経営の日本語学校の実数を把握することが困難だったことである。

今一つは、韓国外国語大学生が冬季休暇を利用し、8カ国語の無料講習を開いたことである。講座中、日本語は人気が高く90名の定員で120名が受講していた。「朝鮮日報」の記事の日付が1961年1月13日であることから推察すると、遅くとも1960年12月において韓国外国語大学で日本語を専門に学習する学生が存在したことになる。

一般に日本語学校で使用されたテキストは5、6種

類の「日本語読本」であった。金（1994）は日本語教育の担い手が80年代後半まで日本統治下で日本語を学んだ児童であったと述べている。敬語の視点からいえば、教授者の知識は固定化された社会的身分階層の枠組みのなかに限定されていたであろう。

1961年1月13日付「朝鮮日報」によると、外大生が使用した教科書は日本国定教科書中学用「国語」（朝鮮語訳：일본국정교과서중학용「국어」）であったという。朝鮮日報社は国が合格を与えたという意味で「国定」、「국정」を使っただけかと思える。同時期に日本で使用されていたのは日本の検定教科書中学用「中等国語」または「中学国語」であったからである。講師は外大生の他、日本出生者または長期間の日本滞在者であった。日本語学習の目的は20代男女の100名中日本語講読が40%、ラジオ放送を理解するための10%、小説を読むための40%、翻訳の勉強5%、留学目的が5%であった。

IV. 高校日本語学習再開への準備と 解放後初の高校日本語教科書

1) 日本語学習再開への準備

1945年解放時において10歳前後の普通学校児童は、その後、1960年代後半からの高度経済成長を30歳前後でむかえ、その中心的生産人口を占めた。現在は80歳を超える年齢である。そして、彼らの子供世代が、朝鮮動乱以後の韓国第3次教育課程（1974年告示）における高校必修選択科目第2外国語として「日本語上」「日本語下」を初めて履修した。2020年現在、韓国の高校生は2015年改訂教育課程（2017年から段階的に適用開始・2020年完全適用）の下で第2外国語の選択科目として日本語を履修している。

1960年4月19日の李承晩失脚以降、許政が大統領権限を臨時代行し、同年8月13日、ユン・ボソンが第2代大統領に就任する。李と許の二人は「興行倶楽部」の会員であり、両名ともアメリカ留学経験者であった。日本留学組との交友は緊密であったであろう。1960年代当初、一部の日本書籍が解放され、日本書籍専門店の出店があり、民間の日本語学校が出現した。大学における日本語教育の実施、日本語学科の設置を求める教育者の意見が「朝鮮日報」に掲載されたことから判断して、1960年代当初、韓国では日本文化、日本語教育に対して賛同する意見がある一

方で、それへの拒否反応も未だに存在していたと見るべきであろう。

しかし、事態は韓国の国民感情と無関係に大きく動き出し、1965年6月22日、佐藤栄作自民党内閣と朴正熙政権間で日韓国交正常化の基本条約が調印され、日韓関係は新しい段階に入った。基本条約調印後のレセプションでの李東元（이동원 イ・ドンウォン）外務部長官の日本語による挨拶を1965年6月23日付「朝日新聞」より引用する。

（前略）「あまりうまくなくて申しわけないが」と前置きし、日本語であいさつした。「心ある韓国人はきょうの調印を喜んでくれるにちがいない。この上はできるだけ早く議会の批准を経て、“兄弟国”としてのおつき合いを願いたい」とたどたどしいが誠実で、ユーモアをまじえた話しぶりだった。（後略）

佐藤栄作首相は談話を発表している。

（前略）千年以上長くかつ古くからの相互関係の歴史を有し、一衣帯水の間にある日韓両国が、それぞれの立場を尊重しつつ善隣友好の道を歩むことは、きわめて当然のことであり、これにより両国の繁栄とアジアの平和安定が一段と増進されることを確信するものである。（後略）

李外務部長官の日本語による発言、「兄弟国」という言葉の言及、佐藤首相談話に「一衣帯水」、「善隣友好」という互いを近い存在として認め合う言葉が入っていることは、彼らの言質がどこにあるにせよ、韓国の1950年前後の日本文化、日本語に対する否定的な態度や日本側の韓国への無関心から一変したと思える。基本条約締結から7年後、ようやく文教部は日本語教育再開に向けてその準備段階に入った。1972年7月7日付「朝鮮日報」を引用する。

文教部は6日日本語教育方針を公表した。「最も近く、最も距離を感じた日本を知るべきである」という時代的要請に伴いこの間日本語教育の必要性を痛感してきたわけだ

が、国民感情を考慮し、試験的な施策も先送りしてきた。若い世代が国際社会で積極的に活躍する力を養成するためにも、日本語教育は必要である。」文教部はこの準備作業に今年1月から入り、民間の日本語学校の正式認可と日本語講師の日本留学を奨励しつつ、教科課程、教科書編纂、日本語教員需給計画策定等、具体的実施法案を作成中であると明かした。

泉（2008）によると韓国高校で必修外国語選択科目に日本語が加わったのは、1974年2月4日付文教部令第310号あり、学校現場での日本語教育再開は1975年度からであった。同記事の中で外国語大学イ・ユンギョン教授は、「日本語は独語、仏語より実用的であり学生から人気の科目になる可能性が十分にあり、無分別な日本語ブームに流され日本語を選択しかねない。」と警告している。

また、韓国高校で必修外国語選択科目に日本語が導入される直前の1973年3月9日付「朝鮮日報」に、日本語導入に関する憂慮が述べられている。

（前略）日本語学習時以外で韓国人同士が日本語で会話することも慎むべきである。観光客ではなく長期滞在の日本人には韓国語を覚えていただくことを望む。それが礼儀ではないだろうか。ある人は英語、仏語であれば特に問題にもならないが、日本語となると神経を逆なでられるという。これこそが問題であり、吾々の国が抱えている特殊性なのである。

韓国人が抱えている日本語に対する複雑な思いがよく反映されている。韓国人にとって日本語は単なる外国語ではなく、日本統治下で強いられた言語であることを考慮すれば、理解できる記事内容である。

2) 解放後初めての高校日本語教科書の編纂主体

では、1974年に高校必修外国語選択科目の一つになった日本語教科書はどのようなものであったのかを検討する。

先ず、1945年以降の軍政下の教育課程を含めた11回に及ぶ教育課程変遷の中で1974年は日本語教育に

おいてどのような位置づけの年であったのだろうか。石川（2017）によると、韓国の教育基本法第2条に「公益人間」（広く人間社会に利益を与える）の理念の下、人格を淘汰し、民主市民の資質を身に着け民主国家の発展と人類共栄の理想の実現に貢献すると宣言されている。第2条は各教育課程の小・中・高共通の総論の記述に反映されている。1945年9月17日に始まった米軍政下における朝鮮総督府学務局は1948年11月4日に「文教部」に名称を変え、1990年12月27日、「教育部」にさらに名称を変更した。それ以降も名称変更があったが、2020年現在、名称を「教育部」に戻している。Ⅲ章で述べた1960年代の韓国国内における民間の日本語学校は当時の文教部の管理下に置かれていた。日本の文部省の管理対象が公教育のみであることと大きく異なる。

韓国の教育課程は第5次まで前回の教育課程の補完・修正をくり返し、1974年は第3次教育課程（学問中心教育課程）告示の年であり、その前年が日本語教科書検定の第3次検定の年であった。この第3次教育課程は日本語科のためののみ設定されたと言っても過言ではない。つまり、外国語選択科目に日本語が加わり、そのために教育課程を新たに設定しなければならなかったのである。馬居（2011）によると、教育課程の拘束力は非常に強く、国公立を問わず、ほぼ全ての小・中・高の教育内容、方法、評価の基準となる。その内容を徹底するため教育課程評価院が中心になって全国各地でワークショップが開催されている。また授業では伝統的に教科書が重視され、その内容は教育課程に基づき編纂される。

1974年当時、韓国の教科書は第1種の国定教科書と第2種の検定教科書があり、第2種の場合、編著者が教科書を編纂し、文教部が検定する構図になっていた。文部科学省の調査報告（2008）には第3次教育課程期から第5次教育課程期（1973年～1992年）まで各科目の合格数を5種以内と制限したため、教科書会社間の競争がきわめて激しかったと述べられている。教育課程策定主体者である文教部は各教科書会社への発言力が大きかったと言えよう。

1974年2月4日付文教部令第310号により高校必修外国語選択科目に導入が決定された日本語の教科書は1975年から学校現場で使用されたが、ここでは1974年発行の「日本語読本(上)」,「日本語読本(下)」の内容について検討する。編纂主体者は「日本語教

育研究会」であり、発行人は「高等教科書株式会社」である。

教科書編纂主体および編纂の周辺の人々の相互関与について述べる。日本では1種類の教科書を編纂する場合、複数の教科書編纂者が加わり、協議をとって編纂作業を進め、文部省の検定を受けるが、75年の日本語教科書編纂（検定年と発行年・使用年にはそれぞれ1年のずれがあり、便宜上、使用年に統一した。これ以降「〇〇年の日本語教科書」という表現をとる）の場合、日韓国交正常化という歴史的経緯があり、単元の内容構成について政権側の要求を受け、文教部編纂担当者の監督の下で編纂主体である「日本語教育研究会」が文教部との協議を持ったのだろう。V章1)の図1の内容構成をみるかぎり、政権および文教部の要求が如実に反映されていると思われる、文教部が事実上の編纂主体だったといえる。

3) 単元内容構成と目指す生徒像

「日本語読本(上)」、「日本語読本(下)」の内容の特徴は三つ指摘できる。一つ目は、壬申倭乱の際の李舜臣の活躍、朱子学の大家である李退溪、ハンデル創成など、日本統治下における「普通学校国語読本」では掲載が全くなかった朝鮮の歴史上の人物や文化が題材に使用されていることである。二つ目は、朴正熙政権下での「平和統一外交宣言」、高速道路などのインフラ整備、造船業への支援・隆盛、緑化活動、セマウル運動（農村の自助・協同）などを教材にし、政権支持の基盤を盤石なものにする企図が感じられることである。三つ目は、戦後日本の復興の理由や日本統治時代から現在までの日韓交流についての「釜関フェリー」の視点からの考察など、相互理解の深化を目指していることである。

また日本のかな文字やことわざを紹介・解説し、日本の代表的な哲学者である和辻哲郎の「木の根」を紹介している。

以上の特徴から帰納できる日本語教科書編纂者そしてその編纂指針を指導・監督した文教部の目指した生徒像は、①自国の歴史・文化を尊重する、②現政権を支持する、③戦後日本との文化交流を積極的に担う、といったものであったと考えられる。

1975年の日本語教科書では政権支持を訴える単元が総単元数の24%を占めていた。事実上の編纂主体

である文教部は政権支持を前面に出すことで日本語教育再開について国民からの反発を躲す意図があったと考えられる。

4) 75年日本語教科書における敬語の範例

1975年の日本語教科書では固定化された身分階層の枠組みでの尊敬語・謙譲語の使用は少なくなり、日本語学習者としてまず習得すべき「です・ます」を基調にして、場面や状況、話し手と聞き手の関係性を考慮して敬語を使用している。

「日本語読本(上)」第22課 お手伝い
(前略) お客様の お帰りの あと、母はわたしに、「ご苦労だったね。」と やさしく 言って くれました。

下線部は「普通学校国語読本」に従えば、「～と行って くださいました。」となるところである。

「日本語読本(上)」第21課 冬の 夜
(前略) 父は、なわを なって います。
母は、ぬい物を して います。(中略)「こ
としも きつと と豊年だよ。」と、父が い
いました。

下線部は聞き手に対する敬語である「です・ます」のみを使用し、年長者への絶対的な敬語使用は見られない。一方で、下記の下線部のように話題の相手には尊敬語を使用している。

「日本語読本(上)」第22課 お手伝い
きょう、お客さまが おいでに なりました。
(中略) お客さまの お帰りの あと、
(後略)

「日本語読本(上)」第30課 かぜ
(前略) (下宿の管理人に対し)「あの・・・
おばさん、すみませんが、ちょっと 来
て くださいませんか。」(中略)「すみませんが、
窓が 少し あいて いますから、し
めて くださいませんか。(後略)

さらに、級友間のやり取りでは「です・ます」を

使わない以下のような会話例が掲載されている。

「日本語読本（下）」第20課 本屋で
 山田：先週の日曜日はどうして過ごしたの。
 野村：一日中家で本を読んでいたよ。
 山田：君はまったく本の虫だね。（後略）

練習問題

友だちから次のように聞かれたとしたらどう答えますか。

①君、昨日の日曜日は何をして過ごしたの。
 （後略）

山田と野村のような級友の場合、互いの心理的距離の近さを示すために「です・ます」を使っていないことを練習問題もあわせ学ぶ作りになっている。学習者は現代日本語の敬語使用が相手との心理的距離感を軸とした相対敬語的な体系に移行していることを学ぶことになる。

以上述べてきたように、75年の日本語教科書では日本統治下での固定化された身分階層に基づく敬語使用から、場面に応じて相手との心理的距離に応じて適切な敬語を選択して、相手との円滑な人間関係を築こうとする現代敬語の使用を反映したものに変わってきていると言えるだろう。

V. 1990年の高校日本語教科書

1) 90年高校日本語教科書の内容構成と編成

韓国外国語大学の学生による1960年代当初の民間日本語学校における日本語講座開講、韓国外国語大学大学院日本語学科卒の教員による83年および90年の高校教科書「日本語上」、「日本語下」の編纂を考慮すると、韓国の日本語教育において韓国外大が指導的立場にあったことは明らかである。ここでは、韓国外大教授パク・ヒデ及び聖心女子大学教授ユ・ジェドが執筆した90年の日本語教科書（金星教科書株式会社）が、その内容構成において75年の日本語教科書とどのように異なるのかを検討する。

1975年の教科書の内容構成はIV章3)で述べたように政権の支持を訴える意思が如実に反映した単元があり、政権の要求を受けた内容構成であったが、90年の編纂者である両名は、日本語運用能力向上を念頭において、会話練習が容易にできる題材の選考と場面設定に心を砕いているようである。「日本語上」では一人称者の周辺で起きる出来事についての級友や家族の知人との会話を基にした運用練習や「練習」とおして、重要表現の定着を図っている。「日本語下」では題材を学習者の周辺の事象や物事に求め、解説文の形態をとり、次に同じ話題についての対話文とおして運用練習をする形式となっている。図1

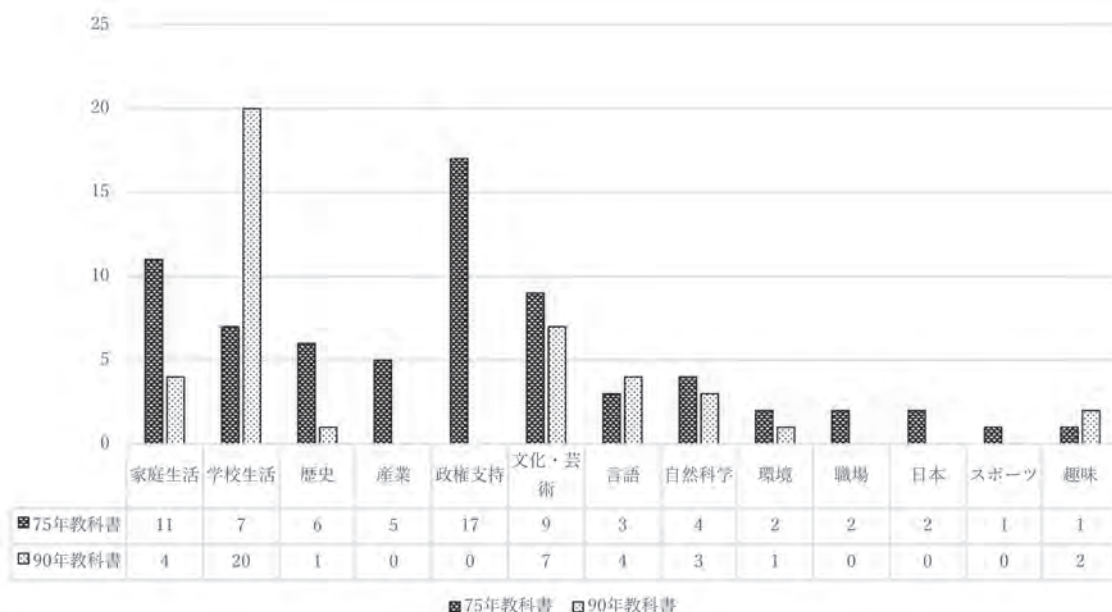


図1 1975年と1990年日本語教科書の内容別単元数。（単元総数'75年は70，'90年は42）

Fig. 1 Numbers of the lessons with the same topics in the 1975 and 1990 textbooks.

は75年と90年の日本語教科書の内容で類別した単元数である。

2) 90年高校日本語教科書の範例

では、90年高校日本語教科書の具体的な敬語の範例を見てみよう。相手との関係性や心的距離に基づいた相対的な敬語使用を基本としている点は75年教科書と同様であるが、同時に比較的簡単な尊敬語・謙讓語の例が示されている。

「高等学校日本語上」第10課 日本語を習って います

(前略) 呉美善(オ・ミソン)さんには ご兄弟が ありますか。

—ええ、兄と 妹が 一人ずつ あります。

お兄さんは 何を して いますか。

—兄は 大学生です。(後略)

ここでは、兄弟が「います」とすべきところを「あります」としているという問題点もあるが、級友の兄弟に「ご兄弟」、「お兄さん」という尊敬語を使い、一方、自分の兄には〈うち〉の視点で「兄」を使っている。

次の事例は授受動詞「あげる・くれる／もらう」を含め、〈うち・そと〉の区別を設けて、敬語使用の有無を選択している。

「高等学校日本語上」第21課 バッジを くださいました

友だちのお父さんが ソウルオリンピックを記念する バッジを いくつか くださいました。(中略)その 代わり、妹は わたしに ボールペンを くれましたが、(中略) 母は、妹に プレゼントを して あげると 言っています。(後略)

級友：きれいな バッジですね。

一人称者：友だちの お父さんに もらっ たのです。(後略)

(うち・そと)の視点に立脚すれば、最後の「お父さんにもらった」は「いただいた」と謙讓語を使用したほうがより適切かと思えるが、級友の父でない場合は「もらう」を使うことは今の日本語の敬語

使用では珍しくない。

謙讓語「お／ご～する」は90年高校日本語教科書で扱われている。下記に範例をあげる。

「高等学校日本語上」第22課 家にお客さんが 来て おられます

家人：お見送りしたいんですが。

客：寄りたい 所も ありますし、空港までの 見送りは、みんな おことわりして いますから、ここで お別れしましょう。

「高等学校日本語下」第6課 本とのめぐりあい

A：読み終わったら、お貸ししてもいいですよ。

B：そうですか。お読みになったあとで、ぜひお願いいたします。

「高等学校日本語上」第19課「先生に ほめられました」は登場する二人の関係性を〈対話の敬語〉「です・ます」の有無で考えることができる。

A(女性)：きょうは きげんが いいのね。

B(男性)：先生に ほめられたんです。

A(女性)：ほんと、いつも せんせいに しかられてばかり いたんじゃないの。

B(男性)：そんな こと ないですよ。たまには ほめられた ことも ありますよ。

下線部において女性が「です・ます」を使わず、男性が使っていることから、女性が男性より年長であると想定される。

次に尊敬語と謙讓語を含んだやりとりを検討してみよう。一人称者である高校生の家に父の日本人の友人が訪ねてきた場面である。

「高等学校日本語上」第22課 家にお客さんが 来て おられます

家に 日本人の ①お客さんが 来て おられます。父の 親しい 友だちですが、

韓国へは はじめて 来られたと いう
ことです。

高校生：はじめて お目に かかります。

わたしは 朴敬植と 申します。

客：はじめまして。松村です。朴君の こ
とは 前から ②うかがって おります。
よろしく。

下線①は「来て いらっしゃいます」の方が適切
であるが、編著者は従来からある西日本的尊敬語と
しての「おられる」を選択したようだ。下線②は初
対面の改まった場において、知人から聞いている意
味で謙譲語である「うかがう」を使い、一人称者を
低めて「おります」を使っている。くつろいだ場で
あれば、相手が高校生なので、「うかがっています」、
「聞いています」を使っても許容されるだろう。

以上90年日本語教科書の言語運用面に重点をおい
た内容構成、本文→対話文をとおした運用練習とい
う一連の学習段階の内容の一部を見てきた。そこには
相手との心理的距離感を判断しながら、尊敬語、
謙譲語、丁寧語、美化語や普通体を選択し、相手と
の良い人間関係を構築しようとする現代日本語の敬
語体系を学ばせようとする姿勢がうかがえる。

VI. 1992年告示の第6次教育課程以降の 日本語学習目標の変化

IV章2) で述べたように、日本語が第2外国語選択
科目に加えられたのは第3次教育課程（1974年～1981
年）からである。1974年2月4日付文教部令第310号に
より高校外国語必修選択科目に日本語が導入された。
宋（2004）の説明によると、90年代後半に入り、流
暢さを備えた外国語教育の必要性が叫ばれ、1992年
告示の第6次教育課程では日本語の流暢さが求めら
れた。泉（2008）によると、この間の日本語教科書
検定は1973年の第3次検定で合格したのは、前期上・
下各一冊の2種、後期上・下各一冊の2種の合計4種で
あった。次の第4次検定では1984年、5社、上・下各
一冊の10種、第5次検定では1990年、8社、16種、第6
次検定では1996年、12社、上・下各一冊、24種が検
定に合格した。なかでも1981年12月31日、文教部告
示第442号で検定を通過した5種の教科書が改正され、
84年度から施行、使用されたものは、75年度から使

用された解放後初の日本語教科書以来、新たに採用
された戦後韓国の日本語教育のターニングポイント
になった日本語教科書といえよう。なお、文部科学
省の調査報告（2008）では、検定合格数の制限がな
くなり、第7次教育課程期（1997～2007年）の高校教
科書の各教科の平均検定合格率は58%に高まった。

ここではまず、大学入試制度の視点から普通高校
の日本語学習状況を考察する。金（1996）によれば、
第4次教育課程告示（1981年）の翌年、文教部による
「学力考査」が実施され（日本のセンター試験に該
当）、英語と第2外国語を「外国語」としてまとめ、
どちらかを選択するようになった。第4次教育課程下
の1986年、第2外国語が英語から独立した結果、日本
語が学び易いこともあり、日本語選択者が激増し、
韓国教育統計年鑑によると、第6次教育課程告示の翌
年1993年、普通高校での日本語学習者は32万人を超
えた。実業高校も合わせると、日本語選択者数は80
万人を超え、第2外国語学習総人口の過半数を占めた。
同じ選択外国語科目である独語は約55万人、仏語32
万人であった。教育部は世界で競争していく人材の
養成を企図し、第6次教育課程のなかで、相手との意
思疎通能力の一つである「流暢さ」を提示したので
あろう。しかし第6次教育課程告示の3年目になる
1994年、修学能力試験（日本のセンター試験に該
当）が導入され、各大学が任意に行う独自の試験と内
申書成績を総合審査し、合否を決める手法に変わり、
第2外国語は修学能力試験から除外された。受験生の
心理を推測すれば当然の帰結であるが、普通高校に
おける第2外国語選択者は激減し、日本語選択者は
1993年よりも8万人少ない約24万人に減少した。図2
は国際交流基金（2015, 2020）及び金（1996）の資
料に基づいて高校日本語履修者数の推移をグラフ化
したものである。

1974年に高校外国語選択科目への日本語の導入が
告示された韓国だが、その後の大学入試制度の変革
によって、日本語選択者数を見る限り、高校での日
本語教育の立ち位置は極めて不安定であったと言わ
ざるを得ない。

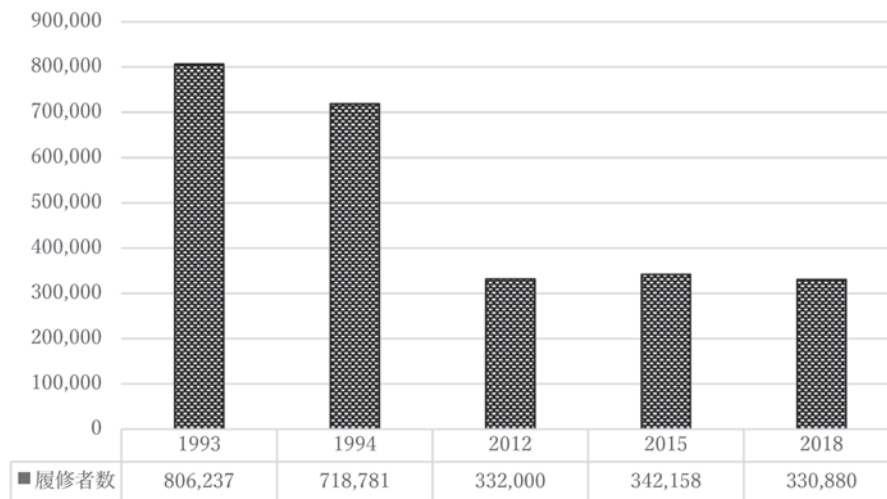


図2 日本語 I, II 履修者数推移.

Fig. 2 Changes in the numbers of the senior high school students learning Japanese from 1993 to 2018.

VII. 現在の高校日本語教科書と日本語敬語学習

1) 高校日本語教科書の新しい編纂指針と履修義務の廃止

1992年告示の第6次教育課程（改訂主要テーマ：民主市民資質育成の強調）の下では、日本語の流暢さ、実用的なコミュニケーション能力の習得、日本文化を理解する姿勢と国際交流を積極的に行う態度の育成を目指している。

金（1996）は京都会議において、1994年の韓国高校必修第2外国語履修単位数が普通高校で10単位、実業高校で6単位であると述べている。日本語の授業は各学年週2, 3単位、もしくは4単位程度で運用されていることになる。民主市民資質育成の強調を改訂の主要テーマにしている第6次教育課程下の日本語教科書編纂指針は、日本語の流暢さに加え、相互意思疎通能力・理解力の育成と日本理解を柱にしているが、この指針はそれ以降の教育課程下の日本語教科書編纂指針として活かされている。しかし、2009年に第2外国語履修義務廃止が発表され、2011年度の1年生より適用された。教育課程自由化方針により選択教育課程が導入されたのである。

2) 時事日本語教科書（2014年初版発行、2020年第7刷発行）の編纂主体が求める生徒像 編著者一同の冒頭の言葉を引用する。

（前略）日本は地理的、歴史的、文化的に私達と切っても切れない関係を持つ国です。そうであるからこそ望ましい韓日関係を創出しなければなりません。そのためには日本語学習は必須であるといえます。（中略）皆さんは日本語を知らなくても多様な日本文化を体験し、日本の友人と交流をしている場合もあるでしょう。日本の友人が私達の文化を理解していると、より一層親近感を持ち、友人との距離が短くなるのと同じように、皆さんが日本語を学び話すようになり日本文化をより深く理解すると、日本の友人は皆さんをより一層近い存在として感じるでしょう。（後略）

編著者は日本語学習をとおして、日本語の運用能力を積極的に身に付け、日本文化について知り、日韓交流において活躍できる能力の養成を目的にしている。

一方、図3は日本語学習者の動機について、国際交流基金による中等教育機関への聞き取り調査報告に基づいてグラフ化したものである。教育機関数は2,137で、複数回答が可能である。直接の生徒への聞き取り調査ではないが、各中学・高校の担当者1名が考える各学校の生徒の日本語学習目的であり、各項目に該当すれば1とカウントしている。これによれば、日本文化の解放により、アニメや歴史、芸術などに対す

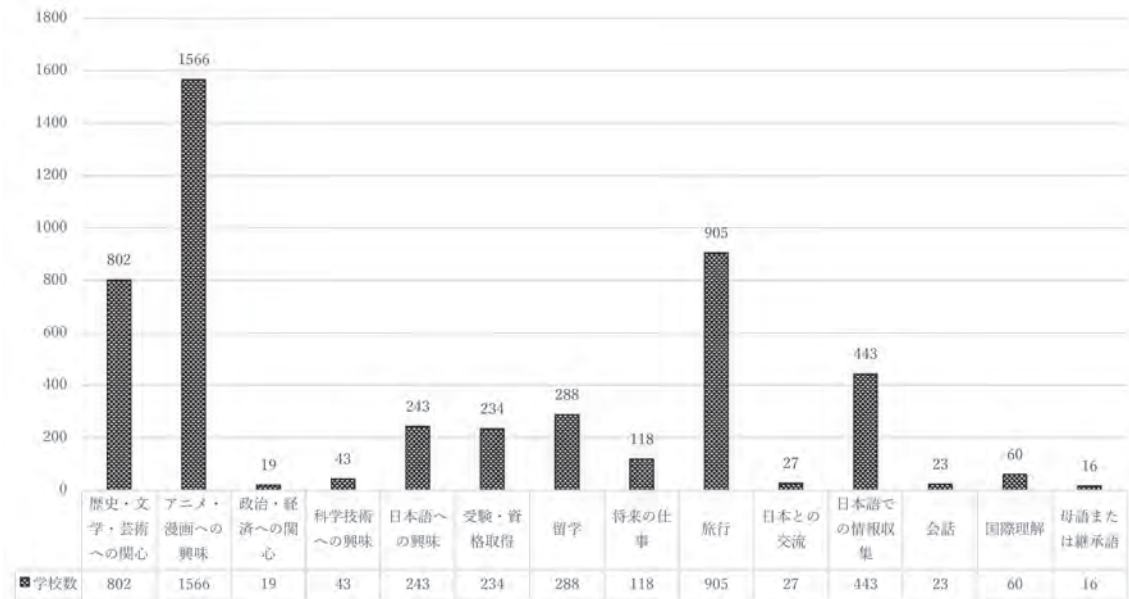


図3 2018年の中高生の日本語学習の目的。(学校単位で回答)

Fig. 3 Objectives of Japanese learning among junior and senior high school students in 2018.

る関心が喚起されているようだ。また、実際に日本を旅行してみたい生徒も半数近い学校で見受けられ、13%を超える学校で日本留学を考えている生徒がいるようである。

3) 教科書の内容の構成

2009年改訂教育課程(改訂主要テーマ: 創意的な教育課程運営と学習負担の軽減)の下で認可された京畿道高校使用の以下の教科書を調査対象にした。2014年初版発行、2020年第7刷発行の時事日本語社教科書(著者イ・ギョンス, 他4名), チョンジェ教育教科書(著者ミン・カンジュン, 他5名)およびミレエン教科書(著者オ・ヒョンジョン, 他6名)の三社の日本語Iと日本語IIの6種である。

時事日本語社教科書は韓国人高校生ジフが自らの生活体験を通して日本文化を学ぶ構成になっている。他4種も同様に、韓国の高校生が留学先の日本で日本語や日本文化を学んでいく構成を採用している。この構成の下に各単元が整序され、学習者は日本を疑似体験し、日本語および場面に適切な敬語を学習していく。

4) 各単元における学習過程と敬語学習

各単元の学習過程は3社とも概ね同様であり、新しい単語・語句の聞き取り、練習問題をとおした発音練

習、会話文の提示とその練習、条件付き会話練習、与えられた情報の理解、日本文化についての理解という構成である。

時事日本語社教科書では韓国人留学生ジフが家族や友人との交流のなかで主体的に日本語や日本文化を学ぶ構成になっている。

以下の会話文で、丁寧語「です・ます」の使用の有無について考察してみよう。

第5課 「ケーキをどうぞ」ダイアログ1 82p.

エミリー: ジフ君, 今日はもりたさんのたんじょうびですよ。

ジフ: そうですか。もりたさん, おめでとうございます。

もりた: ありがとうございます。

ジフ: プレゼントはなにがほしいですか。

もりた: まんががいです。

第9課 「どうしたの?」ダイアログ2 148p.

ジフ: 中村くん, 行きたい大学きまった?

中村: うん。どうぶつの べんきょうをしに, ほっかいどう大学に 行きたいんだ。

ジフ：ほっかいどうか。いいね。ひろく
て すてきな ところだよ。

中村：うん。ジフ君は 日本の 大学に
行く つもりだよ。

ジフ：そうだよ。きのう 先生に そう
だん したんだ。

森田は だいがく どう するの？

森田：私のかんごしに なりたいから
かんご大学に 行く つもり。

ジフ：へえ。

中村：それはいいね。 さいきん 日本
では かんごしが 不足しているそう
だから。

第5課でジフは誕生日を迎えた級友の森田に「もり
たさん、おめでとうございます。」と発言し、「もり
たさん」と敬称を使用しているが、第9課では彼らが
親密な関係であることを表現するために丁寧語「で
す・ます」を使用していない。ジフの日本滞在が進
み、級友との心的距離がなくなり、親密度が増して
いることがうかがい知れる。またジフの発話のなか
の「森田は だいがく どう するの？」の発話は
ジフが森田を呼び捨てにすることで二人の親密さを
表現している。

第8課 「いらっしやいませ」練習問題 133p.

相撲見物に訪れた体育館の柵席を見て、
韓国人観光客が同伴している日本人に向け、
2通りの表現を使う。下線部は学習者が聞き
取って記入する形式になっている。

韓国人：いろんなせきが あるね。

日本人：うん、まえの せきが いちば
ん いい せきだよ。

韓国人：いろんな せきが ありますね。

日本人：はい、まえの せきが いちば
ん いい せきですよ。

上の対話は二人の年齢が近く親しい間柄である場
合、下の対話は二人の間に若干の心理的距離があり、
「です・ます」を使う場合について考えさせること
ができる。相手との関係性のなかで敬語を使うこと

の是非を考えさせようとしていると言えよう。チョ
ンジェ教育教科書から「です・ます」の使用・不使
用を学ぶ対話例を見てみよう。

第5課 「てまきずしは どう？」 よんで はなそう 78p.

(前略)

ひろ：この とんかつ ぼくの さくひ
んだよ。どうぞ。

セリ：わ、すごい。

セリ：おいしい！ ひろくん、りょうり
上手だね！

ひろ：そんな こと ないよ。

ひろの はは：セリさん、おかわりは
どう？

セリ：ありがとうございます。でも、も
う おなか いっぱいです。 ごちそう
さまでした。

級友のひろの家に招かれた留学生セリはひろに対
して、「ひろくん、りょうり 上手だね！」といい、
一方、ひろの母親に対しては「です・ます」を使用
している。ひろの母親が年長者であるため、丁寧語
「です・ます」を使うという使い分けの理解である。

下記の練習問題においても、学習者は相手との関
係性から「です・ます」の使用の有無を判断・理解
していく。

練習問題 79p. 対話の相手に合わせて話 してみよう。

(上司の家で)

上司の妻：さとうさん、おかわりは ど
うですか。

さとう : もう おなか いっぱいです。

(級友の家で)

級友 : やまだくん、おかわりは ど
う？

やまだ : もう おなか いっぱい。

ミレエン教科書は、以下のような対話例で相手と
の関係性と場面に応じた丁寧語「です・ます」の使
用について学ばせようとしている。

第9課 「けがは して いないようです」
会話練習143p.

級友A：田中君，試合でけがをしたみた
いだね。

級友B：え，そうなの？ 知らなかった。

同僚A：山下さん，試合でけがをしたみ
たいですね。

同僚B：え，そうなんですか？ 知りま
せんでした。

以上のような現行の韓国の高校日本語教科書の範
例をとおして，現代日本語の敬語使用のうち丁寧語
「です・ます」の使用の有無を中心に分析した。「敬
語は円滑な意思疎通を目指した自己表現の一つであ
る」という思想が韓国高校日本語教科書に低流して
いるとみてよいだろう。

Ⅷ. 小 括

日本統治解放後の韓国における日本語学習再開の
歴史的経緯を分析し，日本語教育および敬語学習に
ついて日本統治下と解放後で何が同じで，何が変化
したのかを検証した。韓国教育部の韓国高校第7次教
育課程（2002年施行）「日本語Ⅰ」，「日本語Ⅱ」の目標
「韓日交流に能動的に対処することのできる人材の
育成」は，その後の教育改革のスピードに合わせた
2007年度改訂，2009年度改訂，2015年度改訂の補完・
修正教育課程下で日本語教科書に継続されている。
日韓市民が対等に交流し，互いの文化を学び合う際
に，相手を尊重し，丁寧に遇することにおいて，敬
語の果たす役割は少なくないといえよう。

1975年の日本語教科書以降，編著者は丁寧語「で
す・ます」を基調にし，「お／ご～になる」に代表さ
れる尊敬語の一部も韓国教育部指導の下，日本語敬
語学習に有機的に取り込まれた。「○○さんは～しま
す。」「○○先生はお～になります。」等の敬意表現は，
「意思疎通のための基本表現力」・「相互理解力」の
修養を目的とする「日本語Ⅰ」，「日本語Ⅱ」の中
に取り込まれている。

また，第6次教育課程以降の日本語学習の目標の一
つである「流暢さ」について，練習問題を通じた言
語運用面の練習内容についても確認した。そこでは
単に機械的な敬意表現の置き換え練習で終わるので

はなく，場面，状況や相手の立場に応じて敬語を選
択する，または敬語を使わないことを選択すると
いった自己表現の自律的行為としての敬語使用を含
んだ言語運用の練習をめざしていることがうかがえ
た。

Ⅸ. おわりに

日本統治からの解放時（1945年）に6歳から10歳ま
での普通学校児童は，その後の韓国の60年代後半以
降の「漢江の奇跡」と呼ばれる高度経済成長を生産
人口の中核として支え，彼らの子供の世代は高校に
おいて選択科目として正式に日本語を学習する機会
を得た。朝鮮総督府の人的繋がりを前提にして，市
井における日本語学校の設立をはじめとする日本語
教育，日本文化の解放，日韓国交正常化を経て，中
等教育機関の日本語教育再開に繋がった。

1945年の日本統治からの解放と1975年の高校での
「日本語Ⅰ」，「日本語Ⅱ」の履修の始まり，さらに
1984年の5種の日本語教科書使用が韓国における日
本語学習の重要な分節点になっている。この時系列
における出来事と日本語教育の人的資源を交差させ
ていくと，交差した場，またはその狭間にいままで
認識されてこなかった人的繋がりがや思想，それに基
づく実践が埋められていたかと思える。これまで，
韓国語母語話者の日本語学習については，お互いが
隣国でありながら，その実像を詳しく知ることがな
いまま，今を迎えているように思う。日本統治下
における普通学校日本語学習の体系化，とりわけ敬
語学習の組織的教育は解放直後に中断したが，日本語
学習否定という揺り戻しの後に，韓国教育部自らが
高校「日本語Ⅰ」，「日本語Ⅱ」を設定し，2018年度
には，41万人を超える韓国中高生が日本語を第2外国
語に選んだ。韓国の総人口約5,127万人に対し，日本
語総学習者数は約53万1千人であり，総人口の1/100
を超える程度が毎年日本語を学んでいることになる。

今後は日韓交流の未来への展望を持ちながら，韓
国の過去から現在までの「国語」及び日本語教育に
注目していきたい。

謝 辞：査読者には本稿の内容の充実につながる有
意義な助言と示唆をいただいた。心からの感謝の意
を表したい。金沢大学環日本海域環境研究センター

塚脇真二教授には研究活動、論文作成において度重なる便宜上のお詫いを頂戴し、感謝に堪えない。また金沢大学自然科学系図書館、中央図書館の職員の方々をはじめ、資料収集に尽力して下さった方々に心より感謝を申し上げます。コロナ禍において筆者を励まし、叱咤して下さった方々に報いるのは論文をとおしてであるという自覚の下、拙稿が一応の完成をみたことをここに報告申し上げます。

注

- 1) 木村 (1998) によると1910年代に日本への留学者は60名に上った。
- 2) 「普通教育普及一面一校案」は普通学校の普及を目指した計画案である。日本統治下では面は行政の単位であり、都市部は府、農村部は郡または面になった。
- 3) 李軫鎬は科挙(文科)ではなく科挙(武科)出身である。
- 4) 朝鮮総督府「官報」1910年8月22日付「誠意忠実ニ新制度ヲ尊重スル韓人ニシテ相当ノ資格アル者ヲ事情ノ許ス限り韓国ニ於ケル帝国官吏ニ登用スヘシ」として、朝鮮人を植民地官吏に任用することを定めた。
- 5) 森田 (1964) は旧総督府の局長級の日本人高等官は軍政庁の指令で各部局に顧問として留まったと述べている。また1945年12月28日現在、38度線以南で残留日本人は28,325名であり、米軍政庁は翌年1月22日付で京城日本人世話会長に2週間以内に軍政庁の直接・間接の事務担当者1,000名とその家族を合わせて4,000名を除き、全員引揚よという通達を出している。

文 献

朝鮮語による文献には文献名の後に*を付した

- 浅井良純, 1995: 日帝侵略初期における朝鮮人官吏の形成について—大韓帝国官吏出身者を中心に—。朝鮮学報, **155**, 47-90.
- 朝日新聞, 1965: 1965年6月23日付, 朝日新聞社, 大阪。
- イギョンス (이경수)・ヨソング (여선구)・ナゴマリ (나고마리)・クァクヨンスク (곽영숙)・ユンナリ (윤나리), 2014: 高等学校日本語 I。時事日本語社, ソウル, 大韓民国, 245p.
- イギョンス (이경수)・ヨソング (여선구)・ナゴマリ (나고마리)・クァクヨンスク (곽영숙)・ユンナリ

- (윤나리)・イス Chol (이수철), 2014: 高等学校日本語 II。時事日本語社, ソウル, 大韓民国, 206p.
- 石川裕之, 2017: 韓国における国家カリキュラムの構成と教育目的—初等教育段階に注目して—。畿央大学紀要, **14**, 19-26.
- 李 軫鎬 (이지노・이진호), 1926: 過去二十年間に於ける朝鮮の教育の発達。朝鮮及満州(復刻版), **233**, 52-59.
- 泉 文明, 2008: 植民地支配下および解放後の日本語教育。龍谷大学龍谷紀要, **29**, 203-212.
- 稲葉継雄, 2010: 朝鮮植民地教育政策史の再検討。九州大学韓国研究センター叢書1, 九州大学出版会, 福岡, 217p.
- 馬居正幸, 2011: 韓国の教育事情。子ども社会研究, **17** 別刷, 143-169.
- オヒョンジョン (오현정)・キムテホ (김태호)・アイザワユカ (아이자와유카)・イシイナオミ (이시이나오미)・キムヘギョン (김혜경)・キムムンジョン (김문정)・ヤンヒジュン (양희준), 2014: 高等学校日本語 I。ミレエン, ソウル, 大韓民国, 223p.
- オヒョンジョン (오현정)・キムテホ (김태호)・アイザワユカ (아이자와유카)・イシイナオミ (이시이나오미)・キムヘギョン (김혜경)・キムムンジョン (김문정)・ヤンヒジュン (양희준), 2014: 高等学校日本語 II。ミレエン, ソウル, 大韓民国, 215p.
- カンジンガッブ (강진갑), 1995: 이진호 (李軫鎬), 韓国民族文化大百科事典*。韓国学中央研究院, 京畿道, ソンナム, 大韓民国.
- カンソングック (강성국), 2005: 韓国教育60年の成長についての教育指標の分析*。韓国教育開発院, ソウル, 大韓民国 203p.
- 木村 幹, 1998: 米軍政期における「政党保守野党」の形成と特質—「東亜日報グループ」研究(二)—。国際協力論集, **6**, 1-28.
- 金 孝子, 1996: 韓国における日本語教育の現況と展望。日本研究・京都会議, **3**, 11-16.
- 国際交流基金, 2017: 海外の日本語教育の現状 2015年度日本語教育機関調査より。国際交流基金, 東京, 76p.
- 国際交流基金, 2020: 海外の日本語教育の現状 2018年度日本語教育機関調査より。国際交流基金, 東京, 93p.
- 宋 誓天, 2004: 韓国の高等学校における日本語教育とその問題点。梅光学院大学・女子短期大学部論集, **37**, 64-79.
- ソンインス (손인수), 1995: 유억겸 (兪億兼), 韓国民族文化大百科事典*。韓国学中央研究院, 京畿道, ソンナム, 大韓民国.

- 徐賢燮, 2012: 韓国に日本文化の流入制限と開放. 長崎県立大学国際情報学部研究紀要, **13**, 241-253.
- 朝鮮総督府, 1940: 朝鮮総督府及所属官署職員録. 京城, 朝鮮, 12-13.
- 朝鮮総督府, 1925: 朝鮮総督府施政年報. 京城, 朝鮮, 141-142.
- 朝鮮総督府, 1926: 朝鮮総督府施政年報. 京城, 朝鮮, 153-154.
- 朝鮮総督府, 1934: 朝鮮総督府施政年報. 京城, 朝鮮, 149-150.
- 朝鮮日報社, 1945: 朝鮮日報11月29日付*. ソウル, 大韓民国.
- 朝鮮日報社, 1945: 朝鮮日報12月27日付*. ソウル, 大韓民国.
- 朝鮮日報社, 1961: 朝鮮日報1月13日付*. ソウル, 大韓民国.
- 朝鮮日報社, 1961: 朝鮮日報5月13日付*. ソウル, 大韓民国.
- 朝鮮日報社, 1972: 朝鮮日報7月7日付*. ソウル, 大韓民国.
- 朝鮮日報社, 1973: 朝鮮日報3月9日付*. ソウル, 大韓民国.
- 日本語教育研究会, 1974: 日本語読本(上). 高等教科書株式会社, ソウル, 大韓民国, 190p.
- 日本語教育研究会, 1974: 日本語読本(下). 高等教科書株式会社, ソウル, 大韓民国, 261p.
- パクヒテ(박희태)・ユジエド(유제더), 1990: 高等学校日本語上. 金星教科書株式会社, ソウル, 大韓民国, 142p.
- パクヒテ(박희태)・ユジエド(유제더), 1991: 高等学校日本語下. 金星教科書株式会社, ソウル, 大韓民国, 142p.
- ミンカンジュン(민광준)・ユンチャングン(윤창근)・パクヘンジャ(박행자)・ユンセラ(윤세라)・パクチャンヒ(박창희)・ワタナベヒロアキ(와타나베히로아키), 2014: 高等学校日本語Ⅰ. チョンジェ教育, ソウル, 大韓民国, 200p.
- ミンカンジュン(민광준)・ユンチャングン(윤창근)・パクヘンジャ(박행자)・ユンセラ(윤세라)・パクチャンヒ(박창희)・ワタナベヒロアキ(와타나베히로아키), 2014: 高等学校日本語Ⅱ. チョンジェ教育, ソウル, 大韓民国, 159p.
- 民衆日報社, 1947: 民衆日報11月11日付*. ソウル, 大韓民国.
- 森田芳夫, 1964: 朝鮮終戦の記録. 巖南堂書店, 東京, 1038p.
- 文部科学省, 2008: 諸外国の教育動向2007年度版. 明石書店, 東京, 340p.